



よずみちゃん

季刊

弥生の出雲王に出会える



出雲弥生の森博物館だより

IZUMO YAYOINOMORI MUSEUM

第23号 (2016年10月)



★秋季企画展

「出雲を掘る」第六話

「出雲郡漆治郷の今昔」

11月13日(日)～1月23日(月)

【入場無料】



杉沢Ⅱ遺跡から仏経山を望む

出雲市は市内斐川町直江に「出雲斐川中央工業団地」を計画し、それに先立つ発掘調査を2012(平成24)年～14(平成26)年までおこないました。

調査地は、JR直江駅の南方約2kmにある低い丘陵地です。ここは奈良時代に「出雲郡漆治郷」と呼ばれた地区の一画で、南には仏経山を望みます。調査は大きな発見をもたらしました。

今回の企画展ではその成果を紹介しします。

1 短命なムラ

— 2000年前の弥生ムラ

造成予定地には、東部に杉沢遺跡と杉沢横穴墓群、南部と西部に杉沢Ⅱ遺跡があり、杉沢遺跡と杉沢Ⅱ遺跡からは弥生時代中ころの住居跡がみつかりました。建物には建て替えたようすがなく、ごく短期間の住まいだったことがわかります。何があったのでしょうか。

2 出雲東部との交流

— 1400年前の横穴墓

古墳時代後期の出雲では、山の斜面に穴を掘って墓とした「横穴墓」が盛んに営まれました。杉沢横穴墓群もその一つですが、その墓室の形は松江市など出雲東部のものと似ていました。どのような交流があったのでしょうか。

3 奈良の都へ続く道

— 1300年前の古代山陰道

奈良時代、奈良の都(平城京)と全国は幅6mから12mもの「高規格道路」でつながっていました。島根・鳥取を走っていた道路が「山陰道」。杉沢Ⅱ遺跡では、この古代山陰道にあたる幅9mの道路が発見されました。尾根を切り通して走る全国的にも例をみない道路です。その実態とは。

4 山あいの瓦工場

— 1300年前の瓦窯跡

杉沢Ⅱ遺跡の古代山陰道に落ちていた古代瓦。これは近くの三井Ⅱ遺跡にあった瓦工場の瓦でした。そこで働いていた瓦職人は備後(広島県北東部)から出張してきていたようです。その背景をさぐります。

●関連講座

【聴講無料】

11月19日(土) 14時～16時

「青色を身にまとう弥生人

— 県内最古のガラス玉の発見—

【講師】 景山このみ

(出雲市文化財課)

12月3日(土) 14時～16時

「鷗尾復元40年」

【講師】 大脇 潔氏

(奈良文化財研究所名誉研究員)

1月22日(日、来年) 14時～16時

「掘った出た、それで？」

— 発掘調査と地域の歴史—

【講師】 花谷 浩(当館)

※いずれも事前申し込み必要

●ギャラリートーク

11月13日(日)・12月10日(土)・

1月14日(土) 10時

【講師】 花谷 浩(当館)

★ギャラリー展示
「大社考古学会の足跡」

戦前の日本史教育においては、古代史Ⅱ 神話とされ、政府は神話を歴史的事実のように解釈することを国民に求めていました。

しかし、戦後になると、市民みずからが日本や地域の古代史を自由に調べ、語るができるようになります。

そのような流れのなか、終戦から2〜3年の間に、全国で考古学ブームが起こり、あちこちで研究サークルや学会が組織されます。

大社考古学会は、考古資料を研究することで、弥生時代・古墳時代の出雲を解き明かすことを目的に、昭和22年大谷從一氏をはじめ、学校の先生や大社町の歴史愛好家によって設立されました。

会員は、大社町とその周辺にある遺跡で発掘や遺物の収集を精力的に行いました。

なかでも猪目洞窟遺跡(猪目町)や、明治大学助教授 杉原莊介氏と共同で行った原山遺跡(大社町修理免)の発掘が有名です。原山遺跡から発見された遠賀川系土器は、弥生時代のはじめに、出雲に農耕集落が誕生していたことを明

らかにし、大社考古学会の名を全国に知らしめます。

また、県内初となる考古資料展示館の大社考古館、そして史跡猪目洞窟遺物包含層出土品収蔵庫の開設にも大きく貢献しました。

出雲弥生の森博物館の「猪目洞窟遺跡出土の人骨やゴホウラ貝の貝輪」について、来館者から「なんでこんなにきれいな状態で残っているの?」と聞かれることがあります。

それは、埋った状況が良かったことに加え、大社考古学会が、考古館・収蔵庫をつくり、遺物の保存・離散防止に努めたことも大きな要因です。

今も輝き続ける「大社考古学会の足跡」をぜひご覧ください。

(原田和紀)



猪目洞窟遺跡出土 第12号人骨

★市内神社境内の石造物調査

第20号でお伝えしましたが、出雲市では現在文化財保護のマスタープランである『出雲市歴史文化基本構想』を策定中で、様々な基礎調査を行っています。出雲市内にある約一九〇社の神社建造物も奈良文化財研究所とともに調査しています。この調査の目的は、出雲地域に特有の神社形式である『大社造』の形態変遷等を探り、出雲ならではの特徴を導き出そうとするものです。

この調査では、神社建造物に加え、境内にある石造物の調査も併せて行っています。鳥居・灯籠・狛犬などが主なものとして挙げられますが、この製作年代から本殿の建立年代を探る手掛かりにもなっています。さらなる精査が必要ですが、現段階での年代をそれぞれ古い順にいくつか紹介します。

●鳥居

- 1位 小田神社(多伎町小田)・・・宝永元年(一七〇四)
- 2位 富能加神社(所原町)・・・正徳六年(一七一六)
- 3位 縣神社(国富町)・久武神社(出西八幡宮(斐川町出西))・・・享保六年(一七二一)

●灯籠

- 1位 若宮神社(十六島町)・・・延享三年(一七四六)
- 2位 宇美神社(平田町)・・・宝暦十三年(一七六三)
- 3位 同・・・明和元年(一七六四)

●狛犬

- 1位 縣神社(国富町)・・・享和元年(一八〇一)
- 2位 許豆神社(十六島町)・・・文化元年(一八〇四)
- 3位 多伎藝神社(多伎町口田儀)・・・文化五年(一八〇八)

今後もこの他の様々な調査成果を皆様にお届けしていきます。

(野坂俊之)



小田神社の鳥居

★古代山陰道特集

山陰地方では最近、約1300年前に造られた古代の道路跡の発見が相次いでいます。文化財課では平成25年に見つかった出雲市斐川町の杉沢遺跡の道路跡（古代山陰道）に関連した二つのイベントを行いましたので、その様子を報告します。

●9月3日に『第44回山陰考古学研究会』を出雲弥生の森博物館で開催しました。

今回のテーマは、「山陰の古代道」と題し、山陰地方の発掘・研究成果の発表と、東亜大学教授の黄暁芬先生の「東洋最古のハイウェイ―秦直道の発掘と認識―」の講演がありました。講演では、今から2200年前に秦の始皇帝が造らせた全長750km、幅30m、広いところでは60m幅の道について説明があり、その規模に圧倒されました。

山陰の調査成果は、幅5～9mの道路跡が鳥取市の青谷横木遺跡をはじめ、鳥取県ではいくつも見つかっていますが、島根県内では数例の調査事例に留まっています。杉沢遺跡では道幅9mの道路が、標高20～30mの尾根上を約1kmに

わたり縦断するという全国でも例がない道路跡を発掘調査しました。偶然かもしれませんが、その工事の技術が、中国の秦の直道とほぼ同じであることが分かり、900年後の日本に技術が継承されたと考えられます。

●9月4日は『1300年前の古代道を歩こう！』『古代山陰道を訪ねて―杉沢遺跡―』と題し、古代山陰道を歩きました。尾根上に延びる古代山陰道について、発掘調査の成果や大規模な土木工事の様子を歩きながら見ました。当日は、台風の影響が心配されましたが、53名の参加がありました。

出雲市内では古代山陰道がどのようなルートであったか、不明な点が多く、今後の発掘調査に併せて『出雲国風土記』の研究が進むことを期待しています。（江角 健）



杉沢遺跡の説明のようす

★速報展示ギャラリーレポート

「越堂たたら跡」

平成26・27年度

発掘調査速報展

10月1日(土) 14時～

11月5日(土) 14時～

【講師】幡中光輔(市文化財課)



展示のようす

越堂たたら跡の発掘調査では、高殿建物内に多くの遺構を確認しました。

その中でも高殿石垣や製鉄炉の床釣りの構造を観察すると、このたたら場が何度かの造り替えを経て長期間操業されたことが判明し、これまでの文献史料の内容を裏付ける重要な痕跡を確認できました。こうした調査成果を中心に、田儀櫻井家のだたら製鉄について語ります。



越堂たたら跡全景

★博物館アテンドコーナー

「藍染め体験」

博物館のアテンドです。

夏休みに博物館で行

われた「藍染め体験教室」があり、娘二人と親子で参加しました。

博物館では毎年、藍染め体験で使う藍を「藍の畑」で自家栽培しています。春に種をまいて夏には収穫できるように育てます。

藍染め体験は、藍の収穫からはじまります。葉をミキサーにかけて液にハンカチを浸し、空気に触れさせる作業を繰り返すと、だんだんとハンカチが濃く染まっています。

娘たちは、初めてする作業ばかりで、特に糊を塗る作業は大変でしたが、白いハンカチが明るい青色に染まり、素敵な柄の入ったハンカチが完成して大喜び。博物館ならではの体験教室は、博物館ホームページや広報いずもなどで案内しています。一緒に参加してみませんか。



◆ 出雲の國伝統芸能交流大会
 ↳ 第51回出雲市
 無形文化財発表会

11月27日(日)



今年で51回目を迎える「出雲市無形文化財発表会」は、出雲の國・斐伊川サミットの「出雲の國伝統芸能交流大会」との共催により、出雲市・雲南市・奥出雲町・飯南町の伝統芸能を一堂に会し、華々しく上演します。
 この機会にぜひご来場ください。



神楽

太鼓

- 時間 午前10時～午後4時
- 場所 平田文化館(平田町)
- 入場料 当日 500円
前売り 400円

中学生以下無料

※当館ほか各販売所で前売券販売
 ■出雲の國名物大抽選会
 発表会終了後に各市町の特産品が当たる抽選会を行います。
 ●市文化財課 21-6893

★館長講座



第2回 11月12日(土)

「考古学とお墓」

第3回 1月14日(土)

「考古学と戦争」

【講師】渡邊貞幸(当館館長)

- 時間 14時～16時
 - 会場 たいけん学習室
 - 定員 80名
 - 受講料 300円
 - 申込方法
- 電話・FAX・ホームページでお申込みください。

★館長コラム⑬



森鷗外の『雁』には、柴田承桂や神田孝平など考古学の世界でも著名な人物の名前が出てきて、鵬外の多彩な交友関係を窺わせます。

柴田承桂は薬学者ですが、文部省が明治10年に刊行した日本最初の考古学概説書『古物学』(原書は英語)の翻訳者です。考古学の定義は、柴田の訳文では「往昔ノ遺蹟遺物ニ憑據シテ、上古ノ沿革史記ヲ演繹スル所ノ學科」となっています。あまりに難解なので原書に当たってみたら、「過去の遺物から歴史を推論する学問」という平易な英文でした。

一方の神田は、学者としても政治家としても有名で、日本最初の考古学の学会である「東京人類学会」の初代会長を務めました。この学会は、明治17年に東京大学にいた考古学・人類学オタクの学生らによって結成され、長老の神田がその会長を引き受けたのです。

人類学会の中心人物だった坪井正五郎(のち東京帝大教授)と鵬外はほぼ同世代です。鵬外は、義

弟の人類学者・小金井良精と坪井の論争に匿名で介入し、坪井を怒らせたりしています。

国家主義の強まりの中で、鵬外は『かのように』を書きます。歴史を研究する真面目な青年が、史実であるかのように語られる記紀神話とどのように折り合いを付けるか悩む物語です。

西欧では、その半世紀も前に進化学論が発表され、科学的で合理的な思想や歴史観が急速に浸透していたことを考えると、日本と西洋の意識の差異に驚くばかりです。
 (渡邊貞幸)

(発行) 出雲弥生の森博物館2016年10月

〒693-0011 島根県出雲市大津町2760
 (TEL)0853-25-1841 (FAX)0853-21-6617
 (E-mail) yayoi@city.izumo.shimane.jp
 http://www.city.izumo.shimane.jp/yayoinomori

- 入館料 / 無料
- 開館時間 / 9:00～17:00(入館は16:30まで)
- 休館日 / 火曜日(祝日の場合は翌平日)・年末年始